

## 花いばら、ここの上とならうよ

旅愁きわまる夕刻、国清山展望公園より川棚温泉から響灘までを望む。道の両側にお地藏さんが並ぶ山頭火山裾丘陵街道を通って、ここへ至る。海山の美しい自然を掌中におさめられる絶景地だ。ここに立てば、〈夕焼うつくしい旅路もをばり〉も胸にぐっと響く。沖のなだらかな三角形の島は厚島（孤留島）。

かえりみてか、俳人は生涯の庵を結びたいと願った。「花いばら、ここの上とならうよ」は、当時の心境である。しかし、寺総代の猛反対にあう。よるべなき貧しい旅僧を受け止める友は、ここにはいなかった。「けふはおわかれの糸瓜がぶらり」の句を残し、同年8月26日、川棚の地を去らなければならなかった。

今、川棚の街を歩くと、辻に湯明神や石仏が祀られるなど、ほのぼのとした昔ながらの趣が感じられる。山頭火が見たままの風景があるいは残り、あるいは建て替わりつつ、後ろ姿がしぐれて消えた俳人を愛惜し、祈念する人々がいる。

「やはり川棚には、何かが漂っている。いる！ それをカメラに納めたい」

これは漂泊俳人の生きざまに魅了され、自らもかつて出羽三山（山形県）や大峰山（奈良・和歌山県）で5年間、山岳修行した経験をもつ求道派写真家、吉岡功治が15年ぶりに川棚温泉を訪れて、カメラで捉えた山頭火再発見記である。



# 川棚温泉をこよなく愛した 漂泊俳人の夢を追って

求道派写真家・吉岡功治の山頭火再発見記

取材||相葉陽子 構成・文||編集部



1933年6月5日、長府三島町入り口付近の路上に立つ種田山頭火(撮影=俳人・近木圭之介氏)

◆種田山頭火(1882~1940) 略伝  
俳人。山口県佐波郡西佐波令村(現防府市)出身。本名正一。大地主の長男として生まれたが、少年期に母が自殺した。大正3年(1914)から萩原井泉水の俳誌『層雲』に俳句を発表。生家破産ののち14年、熊本で出家。その後、九州・中国・四国などを托鉢して歩いた。川棚を出たあと小郡に其中庵(ごちゅうあん)、山口市湯田に風来居(ふうらいきよ)を結ぶも、さらに遍歴。最後は松山市の一草庵(いつそうあん)で、念願の「ころり往生」を遂げた。当時から俳句界の主流だった有季定型に寄らず、己の生き方に通じる自由律俳句を徹底追究し、また自由律に殉じた人生だった。句集『草木塔』、日記紀行集『愚を守る』『あの山越えて』など。なお上の写真を撮影した近木圭之介氏は30歳年長の山頭火と親交を結んだ俳人だったが、2009年3月9日、97歳で逝去された。

室町時代から庶民の湯治場として栄えた川棚温泉。昭和7年(1932)5月24日、そこへ襤褸のごとき僧衣に身をつつんだ男が舞い込んだ。漂泊の俳人、種田山頭火である。

各地を放浪してきた旅の目利きが、この町に一目惚れした。ここで数日病臥したこともあり、50歳の年齢も